

## 環境中予測濃度算定における水稻の育苗箱施用農薬の使用量の取扱いについて(案)

### 1. 経緯

- (1) 水稻の育苗箱に使用される農薬について、環境中予測濃度(PEC)を算定する際には、水稻の移植に使用される育苗箱の単位面積当たり箱数を設定した上で、単位面積当たりの農薬使用量を特定する必要がある。
- (2) これまで、当該箱数を 10a 当たり 20 箱としてPECを算定してきたところであるが、統計データ等に基づき、国内の標準的な栽培管理状況における箱数を整理した。

### 2. 移植に使用される水稻の育苗箱の数について

#### (1) 苗の種類及び使用箱数

水稻の苗には、その生長度合いに応じ、乳苗、稚苗、中苗及び成苗の種類がある。移植時の苗が大きいほど、育苗箱当たりの苗数が少なくなることから、移植に使用される育苗箱の数は多くなる(表1参照)。

なお、20 箱/10a 程度の場合の苗は、稚苗に区分されるものと考えられる。

表1 苗の種類と使用箱数の関係

苗の種類	葉齢	使用箱数(箱/10a)
乳苗	1.8~2.5	10~15
稚苗	3.0~3.5	18~22
中苗	4.0~5.0	30~35
成苗	5.0~6.0	45~55

(出典)『作物』(農山漁村文化協会) (p89)

#### (2) 標準的な栽培管理状況における単位面積当たり育苗箱数

移植時の苗の種類については、北海道及び東北を中心に、稚苗に加え、中苗及び成苗での移植の指導も行われているが、全国ベースでは稚苗が6割と最も多く、最近 10 年間でその普及率に大きな変動はない(表2参照)。

表2 移植する際の苗の種類別普及率(%、全国平均)

年度	14年度	15年度	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度
稚苗	62	62	62	62	63	63	63	63
中苗・成苗	37	37	37	37	36	35	35	35

(出典)「作物統計」(農林水産省大臣官房統計部)より

#### (3) PECの算定に使用する育苗箱数

上記を踏まえ、標準的な栽培管理状況における単位面積当たり育苗箱数としては、稚苗を使用する場合の代表値として 20 箱/10a を使用することが適切と考えられる。

なお、近年では、低コスト栽培法として、乳苗栽培や疎植栽培の普及が推進されており、単位面積当たり育苗箱数が増加する要素は現状ではないものと考えられる。